

令和7年度(2025年度)

カリキュラム編成書

デジタルミュージック科

東北電子専門学校

学 科 概 要 書

デジタルミュージック科

育成人材像

- ① 音楽理論に基づき、シーケンスソフトやPro Tool及びデジタル機器を用いて、多様な楽曲制作・編曲ができる。
- ② 様々な楽器の特性や演奏方法を知り、楽曲制作において表現の幅を広げるとともに、卒業ライブでは各自の役割のもとでイベントを成功に導くことができる。
- ③ CMやゲーム等、依頼者の要望に応じて、パソコンを使い楽曲制作ができる。
- ④ 各種音響機器の操作に関する知識・技術を身に付けて、MAエンジニア、録音スタジオスタッフ、コンサートスタッフなどの音響技術者として業務を遂行することができる。

身に付ける能力

- ① 楽譜の読み方、記号の理解、音程、調と音階、コード、調と音階とコードの関連、コード進行等の音楽理論及び、DAWソフトの操作技能を身に付け、作曲、編曲ができる。
- ② 現代音楽に欠かせない基礎楽器である鍵盤、ギター、ベース、ドラムなどの特性に関する知識を身に付ける。また基礎楽器の演奏を体験し、楽器による音量や音の広がりを確認し、楽曲制作や卒業ライブに活かすことができる。
- ③ ミキサーや波形編集ソフトを操作し、高品質の音源を記録することができる。また、PA音響機器や照明機器等を操作し、卒業ライブを演出することができる。

教育課程編成方針

- ① 豊かな教養と社会常識を身に付けるために、「就職対策」を各年次に配置する。
- ② 1年次は、音楽分野における基礎的知識、楽曲制作理論の基礎的知識、楽器演奏・楽曲制作アプリケーションの基本的操作能力、音響機材の操作能力を身に付けるための専門科目を配置する。また、聴音力を向上のため基礎訓練科目も配置する。
- ③ 2年次は、1年次に身に付けたアプリケーション、機材の操作法、楽曲制作の応用力を高め、音楽分野で即戦力として活躍できる実践力を身に付けるための専門科目を配置する。
- ④ 1年次通年で企業と連携した実習科目を配置する。

授業実施の方針

- ① キャリア教育科目である「就職対策」はオンラインコンテンツを利用した一般常識の学修、履歴書・エントリーシートの記述指導、面接訓練等の実践トレーニングの他、業界企業研究を行う。
- ② 音楽分野における知識習得を目的とした科目は講義形式で行うことを基本とし、知識の定着のための演習は個々及びグループワーク形式で行う。
- ③ 楽曲制作アプリケーション、スタジオ機材の操作技能を身に付けるための専門科目は実習形式で行う。各科目年間6作品程度の課題を作成し、音楽業界で即戦力として活躍できる実践力を身に付ける。
- ④ 実践力を身に付けるために実施する企業と連携した授業は、マニプレート実習としてシンセサイザー及び楽曲制作アプリケーション上で実務に即した音色作り、音の表現の技術や知識を身に付ける。

目標資格

- ・MIDI検定
- ・サウンドレコーディング技術認定
- ・舞台機構調整技能士
- ・マイクロソフトオフィススペシャリスト
- ・マルチメディア検定

目指す職種

- ・ゲームサウンドクリエイター
- ・サウンドプログラマー
- ・MAスタッフ
- ・音響技術者
- ・作曲、編曲者
- ・楽器販売員□

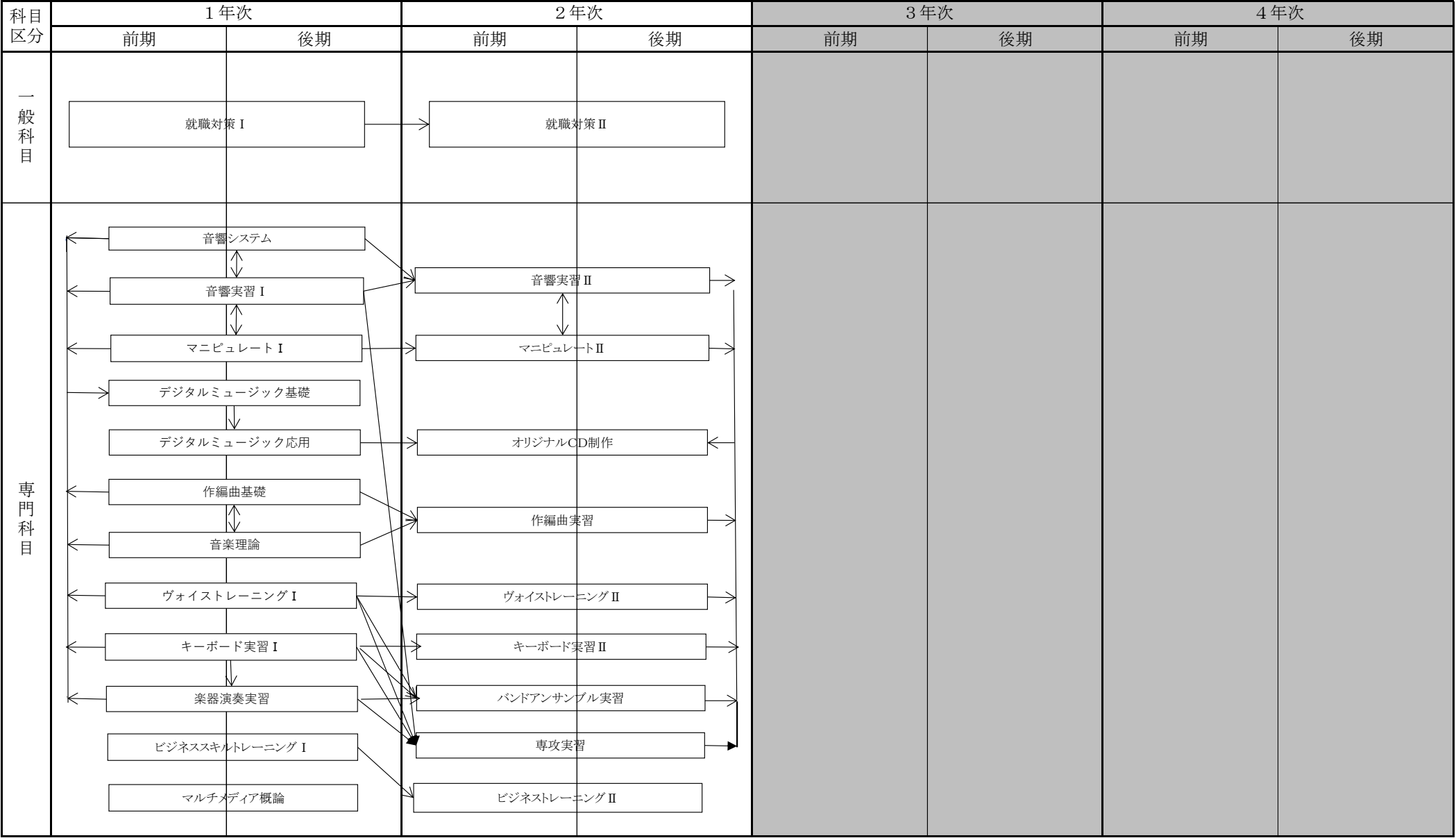
企業連携実習

業界や企業との提携／外部イベント／コンテスト等

- ・卒業生による現在携わっている音楽関係の仕事に関する技術セミナー
- ・楽器メーカーの新製品などの長期試奏

科目関連図

デジタルミュージック科



デジタルミュージック科

1年

シラバス

作成日:2025年4月1日

学 科 名	デジタルミュージック科				
コ ー ス 名					
科 目 名	就職対策 I			科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員		実 務 経 験			
目 的 / 概 要	一般常識や適性試験対策を中心に学習する。就活時必要となるエントリーシートや履歴書は、自己分析により適職を知ったうえ書き方を学ぶ。				
到 達 目 標	就職活動時の一般常識試験に対応できる能力を身につける。				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	特になし				
授 業 計 画 計	コマ数	授 業 内 容			
		※別紙 就職対策 I (別紙①授業計画)			
使 用 教 材	Webコンテンツ LINESを利用(遠隔授業)				
履 修 上 の 意 注	・コマごとの学習目標を掴み、時間内に理解できるようにする。 ・理解できなかった所や復習のため、Webコンテンツ・eラーニングを活用し理解度を高める。 ・ノートをきちんと取り、復習や予習に活かす。 ・以上でも解らなかった所は、Teamsで担任教員に聞き理解できるようにする。 ・(卒業前学年は)履歴書やエントリーシートの書き方を覚える。				
成 績 評 価 の 方 法	・実力試験の成績(年4回実施:ペーパーテスト):60% ・Webコンテンツの回答実績など:平常点:40%				

就 職 対 策 I

作成日：2025年4月1日

< 前 期 >

授業	教科・ジャンル	学習内容	ラインズ・コース
1	数学 オリエンテーション・数の体系1	整数・小数の四則演算	ベーシック
2	数学 数の体系1・数の体系2	()を使った計算、分数の四則演算	ベーシック
3	数学 数の体系2	負の数の四則演算、数の体系、整数の性質	ベーシック
4	数学 単位／組み合わせ・確率	いろいろな単位、単位当たりの大きさ、百分率	ベーシック
5	数学 単位／組み合わせ・確率	平均値・統計・調査	ベーシック
6	数学 量の関係・文字式・関数	2つの量の関係、文字を使った式、比例、一次関数・グラフ	ベーシック
7	数学 量の関係・文字式・関数	方程式・連立方程式	ベーシック
8	数学 累乗・二次方程式	平方根、二次方程式の基礎	ベーシック
9	数学 累乗・二次方程式	式の展開、因数分解、二次方程式の応用	ベーシック
10	数学 図形	図形の基本、面積、体積	ベーシック
11	数学 図形	合同・相似、三平方の定理	ベーシック
12	SPI非言語	SPI計算の基礎、SPI非言語出題分野の基礎、演習問題(割合)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野
13	SPI非言語	SPI非言語分野の基礎、演習問題(未知数の計算、特殊な割合の計算)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野
14	SPI非言語	SPI非言語分野の基礎、演習問題(代金の清算、代金の割合)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野
15	SPI非言語	SPI非言語分野の基礎、演習問題(分割払い、損益算)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野
16	SPI非言語	SPI非言語分野の基礎、演習問題(速さ、場合の数、確率)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野
17	SPI非言語	SPI非言語分野の基礎、演習問題(グラフと領域、集合、推論)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野
18	SPI非言語	SPI非言語分野の基礎、演習問題(表の読取、入出力装置)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野
19	SPI非言語	SPI非言語分野の基礎、演習問題(経路図、資料・長文の読取など)	SPI解法のテクニック[基礎]非言語分野

< 後 期 >

授業	教科・ジャンル	学習内容	ラインズ・コース
1	国語 漢字の読み書き	漢字1～5	スタンダード
2	国語 熟語	熟語の構成、熟語、慣用句・反対語・故事成語・ことわざ	スタンダード
3	国語 敬語	敬語の種類、尊敬語、謙譲語、丁寧語	スタンダード
4	SPI言語	2語の対応関係、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
5	SPI言語	語句の用法、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
6	SPI言語	語句の意味、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
7	SPI言語	熟語の意味、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
8	SPI言語	熟語の成り立ち、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
9	SPI言語	文章の並べ替え、長文読解、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
10	SPI言語	三文構成、空欄補充、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
11	SPI言語	空欄補充・文、長文の要約、演習問題(言語分野)	SPI解法のテクニック言語分野
12	社会 政治・経済、国際・社会生活	経済の仕組み、日本国憲法、世界経済、国民経済と福祉、世界政治等	スタンダード
13	理科 生物	植物、動物、消化と吸収、細胞、遺伝	スタンダード
14	理科 気象・地学・天文など	地層、気象、日本の天気、天体、科学技術と人間、自然と人間	スタンダード
15	SPI模擬テスト マークシート	非言語分野	マークシート1
16	SPI模擬テスト マークシート	言語分野	マークシート1
17	SPI模擬テスト WEBテストイング	非言語分野・言語分野	WEBテストイング1
18	SPI模擬テスト テストセンター	非言語分野・言語分野	テストセンター・固定
19	SPI模擬テスト テストセンター	非言語分野・言語分野	テストセンター・IRT

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		デジタルミュージック基礎		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	2	総授業コマ数	76	単 位 数	4
担 当 教 員	村山 秀樹	実 務 経 験			
目的 / 概要	・楽曲作成のための理論を学び その知識を基に作曲編曲を実践する事により音楽を職業とする (主に音楽製作 プロミュージシャン 音響担当者など)人材の育成を目指す更にはMIDI検定の取得を目的とする 1 基礎理論(楽譜の読み方 記号の理解)2 音程 3 調と音階 4 コード 5 調と音階とコードの関連 6 テンション 7 コード進行 コードパターン コードスケール 8 MIDI検定対策 9 メロディー作り 10 メロディーへのコード付け *進行具合で各項目が重複し、理解度向上をはかる事あり				
到達目標	・デジタルミュージックの中心的な作業であるコンピュータミュージックの知識を広げ 実習を重ねる事により社会的に通じる楽曲の作成録音				
目標資格	MIDI検定				
前提知識	・最低限度のDTM経験が望ましいが 経験が無くても問題なし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	・音楽作成ソフトの理解(2コマ)			
	4	・ミキサー等必要機材の操作(4コマ)			
	60	・実際にソフトを駆使した楽曲の作成 (60コマ)			
	10	・MIDI検定と連動する知識を学ぶ(10コマ)			
計	76				
使用教材	・担当者作成のプリント/実習室設備				
履 修 上 の 意 注	・音楽知識とDTMの融合を促す				
成績評価の方法	・定期的な課題作品の提出・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30% などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		デジタルミュージック応用		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	2	総授業コマ数	76	単 位 数	4
担 当 教 員	白鳥 徹 村山 秀樹	実 務 経 験	楽器メーカーのデジタル機器インストラクターとして、各種セミナー、講演会等で活躍。独立後は楽曲提供や音響技術者として活動。これらの経験を活かし実践的な教育を行う。		
目 的 / 概 要	・デジタルミュージックの中心的な作業であるコンピュータミュージックの知識を広げ 実習を重ねる事により社会的に通じる楽曲の作成録音 ・音楽作成ソフトの理解 ・ミキサー等必要機材の操作 ・実際にソフトを駆使した楽曲の作成 ・MIDI検定と連動する知識を学ぶ * デジタルミュージック基礎の重複や課題のデータ作成を通して知識、技術を習得				
到 達 目 標	・デジタルミュージックの中心的な作業であるコンピュータミュージックの知識を広げ 実習を重ねる事により社会的に通じる楽曲の作成録音				
目 標 資 格	・MIDI検定				
前 提 知 識	・最低限度のDTM経験が望ましいが 経験が無くても問題なし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	・音楽作成ソフトの理解			
	4	・ミキサー等必要機材の操作			
	60	・実際にソフトを駆使した楽曲の作成			
	10	・MIDI検定と連動する知識を学ぶ			
計	76				
使 用 教 材	・担当者作成のプリント/実習室設備				
履 修 上 の 意 注	・音楽知識とDTMの融合を促す				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な課題作品の提出・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30%などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		作編曲基礎		科 目 分 類	独自／共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義／実習／演習
コマ数／週	2	総授業コマ数	76	単 位 数	4
担 当 教 員	桜井 力男	実 務 経 験	アーティストのバックバンド・レコーディング及び楽曲提供・編曲に従事。又音楽教室で後進の指導にあたる。これらの経験を活かし実践的な教育を行う。		
目的／概要	・楽曲作成のための理論を学び その知識を基に作曲編曲を実践する事により音楽を職業とする (主に音楽製作 プロミュージシャン 音響担当者など)人材の育成を目指す更にはMIDI検定の取得を目的とする 1 基礎理論(楽譜の読み方 記号の理解)2 音程 3 調と音階 4 コード 5 調と音階とコードの関連 6 テンション 7 コード進行 コードパターン コードスケール 8 MIDI検定対策 9 メロディー作り 10 メロディーへのコード付け *進行具合で各項目が重複し、理解度向上をはかる事あり				
到達目標	・楽曲作成のための理論を学び その知識を基に作曲編曲を実践する事により音楽を職業とする(主に音楽製作 プロミュージシャン 音響担当者など)人材の育成を目指す更にはMIDI検定 音楽検定の取得を目的とする				
目標資格	MIDI検定				
前提知識	・最低限度の五線譜読解力が望ましいが 読解力が無くても問題なし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	1 基礎理論(楽譜の読み方 記号の理解)			
	2	2 音程			
	2	3 調と音階			
	2	4 コード			
	2	5 調と音階とコードの関連			
	2	6 テンション			
	20	7 コード進行 コードパターン コードスケール			
	6	9 MIDI検定対策			
	20	10 メロディー作り			
	18	11 メロディーへのコード付け			
計	76				
使用教材	・音楽理論書 MIDI検定ガイド書 実習設備				
履 修 上 の 意 注	・他の科目との関連を重視しながら時代に後れないような 講義に十分な配慮が必要である ・生徒各自の音楽経験知識の差をまず無くす ・音楽体験を通じての人間性の向上(特に積極性)にも配慮する				
成績評価の方法	・定期的な課題作品の提出・・・80% ・授業への取り組む姿勢・・・20% などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		マニピュレート I (企業連携科目)		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	白鳥 徹	実 務 経 験	楽器メーカーのデジタル機器インストラクターとして、各種セミナー、講演会等で活躍。独立後は楽曲提供や音響技術者として活動。これらの経験を活かし実践的な教育を行う。		
目 的 / 概 要	①アナログシンセサイザーの増幅器、周波数変換、その他の仕組みや操作法の修得 ②デジタルシンセサイザーの増幅器、周波数変換等の仕組みや操作法の修得とアナログ機器との相違点の理解 ③DAWソフト上でのMIDIコントローラを利用した定位変換、増幅可変器などの仕組みや操作法の修得 ④多チャンネルのDTM音源を使用した各種音色の調整法の修得を目的 ・期末には、企業連携校講師が成績評価を行い、それを踏まえ担任教員が単位認定を行う。				
到 達 目 標	・シンセサイザーの知識・技術を修得する。 ・楽器の特性、曲に合った基本音色を作成できるようにする。 ・基本楽器の自身のイメージに合った音を的確に作成できるようにする。				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	特になし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	・アナログシンセサイザーについての知識を学ぶ。			
	2	・デジタルシンセサイザーについての知識を学ぶ。			
	4	・MIDIについて知識を学ぶ。			
	2	・DAWソフト上でのMIDIコントローラーについて学ぶ。			
	28	・多チャンネルのDTM音源エディットについて各種音色毎の操作法、知識を学ぶ。 ※実習開始前に、担当教員が実習以前の授業で指導した知識・技術の説明を行い、その後有限会社サチオン担当講師が専門性の高い技術的な指導等を一定期間する。			
計	38				
使 用 教 材	・DTM/DAWソフト、音源 各種シンセサイザー				
履 修 上 の 意 注	・オリジナルCD制作において欠かせない基本的な技術、知識でイメージ通りの音の表現が出るよう根気よく取り組むこと				
成 績 評 価 の 方 法	・企業連携実習による課題提出評価・・・70% ・授業に取り組む姿勢・・・30% などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		楽器演奏実習		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	2	総授業コマ数	76	単 位 数	4
担 当 教 員	桜井 力男	実 務 経 験	アーティストのバックバンド・レコーディング及び楽曲提供・編曲に従事。又音楽教室で後進の指導にあたる。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 / 概 要	・デジタルミュージックを行う上での最低限知っておくべき楽器の知識と技術を修得する ・ある程度の知識と技術がある楽器は更なる向上を目指す 主にバンドで使われるギター、ベース、ドラム、キーボードの基礎知識 楽曲を使用してのアンサンブル練習 ・ギター、ベースのスケール練習 ・ドラムを使用してのリズムトレーニング ・ギター、ベース、キーボードによるコード演奏 ・コードによるベースラインの学習 ・メロディーと伴奏				
到 達 目 標	・経験、未経験を問わずそれぞれの楽器を演奏できる様にする ・音楽理論を楽器演奏に応用する ・楽器演奏で学習したことをコンピュータ上で再現、応用できる様にする ・アンサンブルを通してグループ活動による創造活動ができる様にする				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	・初歩的な読譜力				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	76	○主にバンドで使われるギター、ベース、ドラム、キーボードの基礎知識 ・ギター、ベースのスケール練習 ・ドラムを使用してのリズムトレーニング ・ギター、ベース、キーボードによるコード演奏、特にコードによるベースラインの学習 ○楽曲を使用してのアンサンブル練習 ○メロディーと伴奏(76 コマ中上記の内容を平行で学習習得)			
	計 76				
使 用 教 材	・ギター、ベース、ドラムの教則本 ・設備楽器 ・個人所有楽器使用可				
履 修 上 の 意 注	・遊び的な感覚にならないように ・授業時間以外での練習の重要性				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な演奏試験・・・80% ・授業への取り組む姿勢・・・20%などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		キーボード実習 I		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	工藤 さち子	実 務 経 験	楽器メーカーの音楽講師として、ピアノ・エレクトーンを指導、その後プレイヤーとして活動。現在はボーカル、各種楽器を幅広く指導する音楽教室を経営。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 / 概 要	・音楽にとって最も必要な楽器と言うべきキーボード(ピアノ)演奏をレベルアップさせ音楽活動を積極的にする ・コンピュータミュージックに欠かせない「打ち込み」をスムーズにできるようレベルアップする				
到 達 目 標	・一般的なポピュラー楽曲の五線譜を観て初心者は中級レベル、経験者は更なるレベルUPし演奏できるようにする				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	ある程度の読譜力 音楽理論 出来れば演奏経験				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	* 音階 コード 楽譜による演奏			
	6	・ドレミ(階名)で演奏			
	6	・片手でのメロディー弾き			
	24	・コードを覚える 鍵盤で押さえる(弾く)			
	計 38	・両手での楽譜演奏			
使 用 教 材	・一般的な楽譜(ポピュラー中心) ・実習設備のシンセサイザー				
履 修 上 の 意 注	・気長にあせらず演奏能力を高めさせる				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な演奏試験・・・80% ・授業への取り組む姿勢・・・20% などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		ヴォイストレーニング I		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	伊藤 優作	実 務 経 験	ボーカリストとして活躍、自治体行政機関の講師、音楽教室主任講師、プロアーティスト育成機関トレーナーとしても活躍。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 / 概 要	楽器演奏以上に重要な歌う力を持つ 発声練習を基礎にソロボーカリストを目指す バンドでのコーラス要員、歌う事よっての積極性の向上 又聴音力の実力を養う ・ソルフェージュ(視唱 イヤートレーニング) ヴォイストレーニング 歌唱力アップ コーラス 耳コピー *1・2・3項目は毎時実施で習得、項目4中でも実施 1 ドレミ(階名)で視唱 2 ヴォイストレーニング 3 イヤートレーニング(耳コピー) 4 邦楽(ポップス)のヒット曲を歌う				
到 達 目 標	・楽器演奏以上に重要な歌う力を持つ ソロボーカリストを目指す バンドでのコーラス要員 ・耳コピーが出来るようになる				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	・ある程度の読譜力 音楽理論 無くても可				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	28	・ソルフェージュ(視唱 イヤートレーニング) ヴォイストレーニング 歌唱力アップ コーラス 耳コピー A 1～10項目は毎時実施で習得、項目B中でも実施 1 ドレミ(階名)で視唱 2 ヴォイストレーニング 3 イヤートレーニング(耳コピー) 4 胸式呼吸・腹式呼吸の使い方 5 地声と裏声の使い方の違い 6 声量の上げ方、ロングトーンの伸ばし方 7 声帯の筋肉組織の仕組み 8 甲状軟骨、輪状軟骨の筋力トレーニング 9 口腔や舌腔の筋力トレーニング 10 喉仏(喉頭蓋)や胸骨甲状筋のトレーニング			
	10	B 邦楽(ポップス)のヒット曲を歌う			
	計 38				
使 用 教 材	・ヴォイストレーニング用テキスト・キーボード ギターなどの楽器・ミキサーなどの音響機材				
履 修 上 の 意 注	・大きな声を出すことに積極的に取り組む ・遊びと錯覚する可能性に対しての真剣な取り組み ・卒業ライブのレベルアップを謀る				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的試験・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30%などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		音響システム		科 目 分 類	独自／共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義／実習／演習
コマ数／週	2	総授業コマ数	76	単 位 数	4
担 当 教 員	村山 秀樹	実 務 経 験			
目 的 ／ 概 要	・舞台機構調整技能検定に合格し公共機関、その他の音響を仕事にしている職場にも雇用してもらえるチャンスを得る、又演奏者としての的確な要望をスタッフに指示できる知識を学ぶ ・劇場、舞台美術、技術、照明 ・ホール音響基礎、運用 ・映像技術概論 ・ホール、劇場に関する法規				
到 達 目 標	・舞台音響の知識を広く身につけ舞台設置、PA操作等の実際に活かす ・舞台機構調整技能士合格を目指す				
目 標 資 格	・舞台音響技術概論				
前 提 知 識	・特になし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	18	・劇場、舞台美術、技術、照明			
	26	・ホール音響基礎、運用			
	20	・映像技術概論			
	12	・ホール、劇場に関する法規			
	計 76				
使 用 教 材	・舞台音響技術概論 ・実習設備				
履 修 上 の 意 注	・楽器演奏実習、音響技術等で養った演奏能力、PA技術等の融合を促す				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な試験・・・80％ ・授業への取り組む姿勢・・・20％ などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		音響実習 I		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	白鳥 徹	実 務 経 験	楽器メーカーのデジタル機器インストラクターとして、各種セミナー、講演会等で活躍。独立後は楽曲提供や音響技術者として活動。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 / 概 要	・基礎的なミキサーの知識を学び、2年生のライブ実習をまかなえるようにする ・DTM実習時に的確な機材操作ができる力をつける ・基本的なハード、ソフト名称を覚える。・機材接続の基礎知識を習得する。・教室機材説明。 ・アナログミキサーの仕組み/ デジタルミキサーの仕組み ・エフェクターについて / 接続、音出し ・アナログミキサーの仕組み/ デジタルミキサーの仕組み ・エフェクターについて / 接続、音出し ・BGM+マイクを使ったテスト ・中間ライブに関する役割説明 ・中間ライブ実施 ・DTMデータを使ったミキシング ・卒業ライブへの取り組み ・卒業ライブ実施でPA操作等習得 ・舞台機構調整技能士合格を目指す				
到 達 目 標	・BGM+マイク1本程度のバランス取りを確実にできるようにする。 機材接続において、入力から出力までの流れを理解できるようにする。 2年生ライブ実習において全体の流れを把握できるようにする。				
目 標 資 格	・舞台機構技能検定				
前 提 知 識	特になし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	・基本的なハード、ソフト名称を覚える。 機材接続の基礎知識を習得する。 ・教室機材説明			
	2	・アナログミキサーの仕組み/ デジタルミキサーの仕組み			
	6	・エフェクターについて / 接続、音出し ○ BGM+マイクを使ったテスト			
	2	・中間ライブに関する役割説明 ・中間ライブ実施			
	20	・DTMデータを使ったミキシング			
	6	・卒業ライブへの取り組み ・卒業ライブ実施でPA操作等習得			
計	38				
使 用 教 材	・DTM/DAWソフト、音源 アナログミキサー デジタルミキサー マイクロフォン ライブ実習機材 その他音響機器				
履 修 上 の 意 注	・楽器等のレコーディングに関しては2年次に必要に応じ行い1年次には基本的に行わない。				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な実技試験・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30%などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		音楽理論		科 目 分 類	独自／共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義／実習／演習
コマ数／週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	青木 大志	実 務 経 験	ビッグバンドジャズから演歌の伴奏まで多くのアーティストをベース奏者としてサポート。音楽教室で後進の指導にもあたる。又バックトラックの作成・アレンジ・楽譜作成のアーティストサポートでも活躍。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 ／ 概 要	・音楽製作、バンド等における活動においてオリジナル曲の作曲、編曲を専門家として独自に行える音楽の知識の習得 ・音部記号と音名 ・音程 ・調と音階 ・コードの構成 ・テンション ・ダイアトニック・コード ・平行・同主調関係 ・楽曲分析				
到 達 目 標	音楽活動においてオリジナル曲の作曲、編曲を独自に行える 音楽の知識の基礎を学ぶ				
目 標 資 格	・特になし				
前 提 知 識	小・中学校レベルの音楽の知識、無くとも可				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	・音部記号と音名			
	1	・音程			
	2	・調と音階			
	4	・コードの構成			
	2	・テンション			
	14	・ダイアトニック・コード			
	7	・平行・同主調関係			
	6	・楽曲分析			
計	38				
使 用 教 材	・新音楽理論ワークブック				
履 修 上 の 意 注	・音楽理論を疎かにすると独自の曲作りがパターン化するので難しくても根気よく知識を習得し、尚且つ知識だけに終わらせず実践に活かす。				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的考査・・・80% ・日ごろの授業態度・・・20% を総合的に判断				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		マルチメディア概論		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	村山 秀樹	実 務 経 験			
目的 / 概要	・マルチメディアは文字、音声、静止画、動画などをデジタル技術で融合することでコミュニケーションを可能にするものであり、私たちの生活に深く関わってきている。マルチメディア技術の根幹をなすコンピュータやその周辺機器、インターネット、かつデジタルコンテンツ、知的財産権、マルチメディアの応用に関する幅広い知識と技能を修得することを目的としてマルチメディア検定ベーシック合格を目指す。 ・マルチメディアの特徴 ・マルチメディアの中核をなすパーソナルコンピュータ ・コンテンツ制作のためのメディア処理 ・新たなインフラとなったインターネット ・インターネットで提供されるサービス ・急速に伸びるインターネットビジネス ・マルチメディア端末と進化する携帯電話 ・家庭のマルチメディア化 ・日常生活に広がるマルチメディア ・ネットワークセキュリティと著作権				
到達目標	・社会や生活の場で必要なインターネットやマルチメディアに関するコンテンツや技術、システムや機器、コミュニケーション技術に関する知識や能力について修得し、マルチメディア検定の合格を目指す。				
目標資格	マルチメディア検定ベーシック				
前提知識	・高等学校の程度の知識				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	5	・マルチメディアの特徴			
	3	・マルチメディアの中核をなすパーソナルコンピュータ			
	3	・コンテンツ制作のためのメディア処理			
	3	・新たなインフラとなったインターネット			
	5	・インターネットで提供されるサービス			
	3	・急速に伸びるインターネットビジネス			
	4	・マルチメディア端末と進化する携帯電話			
	4	・家庭のマルチメディア化			
	3	・日常生活に広がるマルチメディア			
	5	・ネットワークセキュリティと著作権			
計	38	・マルチメディア社会			
使用教材	・入門マルチメディア (CG-ARTS協会) ・配布プリント				
履 修 上 の 意 注	・授業は必要に応じ、板書したりプリント等を利用するので、ノートを用意する ・各項目は独立して学習が終わるのではなく、関連を持ちながら同時に影響しあっていくので十分留意して学習する ・大切なところはノートにまとめるなどして理解を深める工夫をする				
成 績 評 価 の 方 法	・授業への取り組む姿勢・・・20% ・定期考査・・・80%などを中心に総合的に評価する。				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科				
コ ー ス 名						
科 目 名		ビジネススキルトレーニングⅠ		科 目 分 類	独自／共通	
履 修 年 次		1	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	
コ マ 数 ／ 週		1	総授業コマ数	38	単 位 数	
担 当 教 員		村山 秀樹	実 務 経 験			
目 的 ／ 概 要		・情報関連科目を学習するために必要なWindowsの基本操作を身につける。 ・PCの普及に伴い、家庭や学校でインターネットを利用する機会が増加している。また、携帯電話からもインターネット上のコンテンツを閲覧することが容易な時代となり、近年では学生がネット上で思わぬ被害を受けたり、知らず知らずに加害者になったりするケースや、小中学生においては、新しいメディアとして利用方法を誤り、自殺や殺人に結びつく事態も発生している。 ・「情報倫理」を学習することにより、これからのネットワーク社会を生きていくために、何が正しく何が悪いのかを判断できるような知識を身につけることを目的とする。 ・Power Pointソフトの基礎を身につける。 ・AIリテラシの習得。				
到 達 目 標		・ホームページの閲覧方法を知り、検索エンジンを使って必要な情報をインターネットから得ることができる・学 生用グループウェアサービスを知り、それを使ってEメールを利用できる ・キーボード操作をブラインドタッチで行うことができる ・インターネット社会の「光」と「影」の両面を理解する ・インターネット社会で守るべきルールやマナーを理解する ・アカウントやパスワードの取り扱いと管理のしかたを理解する ・個人情報やプライバシーの意義を理解し、その適切な取扱いについて考える ・著作物の文化的意義を理解し、著作権を尊重する態度を身につける。 AIに関する基本的な考え方や知識、活用事例などについて理解する。				
目 標 資 格						
前 提 知 識		・高等学校の情報科目履修程度の知識				
授 業 計 画		コマ数	授 業 内 容			
		1	・インターネットリテラシー			
		1	・検索ソフト、学生用HP(グループウェア、電子メール)の利用方法			
		4	・情報倫理:Infoss e-Learning ・用語集に掲載の106語は完璧に理解する ・章末に掲載のチェックテストは満点を取るまで繰り返す ・修了テスト(1～5)は正解率80%取得を目標とする			
		3	・AIリテラシに関する動画の視聴および関連用語の理解。 ・AIに関連するテーマを設定しグループワーク・成果発表を行うなど、アクティブラーニングを実践する。			
		6	・ケーススタディ×8分野			
		6	・新聞記事集×12分野			
		20	・タッチタイピングの学習 ・初心者用テキストを使い各自の進捗状況で「Power Pointソフト」修得			
		計	41			
		使 用 教 材		・Infoss e-Learning:情報倫理 ・ 初心者用テキスト Power Poin20△△ ・Udemy 「はじめてのAI」		
履 修 上 の 意 注		・まとめ用ノートを用意する ・e-Learningは「見ただけ」「読んだだけ」では効果なし！ 大切なところはノートにまとめるなどして理解を深める工夫が必要 ・グループディスカッションでは、積極的に自分の意見を述べること ・「継続は力なり」・・・タッチタイピングやPower Point学習は少しの時間でも毎日続けることが上達の近道！				
成 績 評 価 の 方 法		・定期考査・・・70％ ・e-Learningの終了テスト・・・10％ ・授業への取り組む姿勢・・・20％などを中心に総合的に評価する				

デジタルミュージック科

2年

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		オリジナルCD製作		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	5/7	総授業コマ数	228	単 位 数	12
担 当 教 員	白鳥 徹 村山 秀樹	実 務 経 験	楽器メーカーのデジタル機器インストラクターとして、各種セミナー、講演会等で活躍。独立後は楽曲提供や音響技術者として活動。これらの経験を活かし実践的な教育を行う。		
目 的 / 概 要	・学習の集大成としてのオリジナルCDの作成 ・映像メディア等ニーズに合ったオリジナル曲作りを行えるようにする ・いろいろな機材、ソフト等の融合を学び楽曲制作を行えるようにする				
到 達 目 標	・2年間で学んだ音楽知識やソフト、キーボード、ギターその他楽器などの実習で体得した楽器演奏やボーカルを加えたオリジナル楽曲製作の集大成としてCDアルバムの製作を行う ・各学科等制作作品に合ったオリジナル曲作り制作 ・卒業ライブでの演奏曲の作詞、作曲、編曲制作				
目 標 資 格					
前 提 知 識	・1年次で学んだ音楽理論 作編曲知識 DTM知識 音響技術 楽器演奏 バンド活動 歌唱力				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	8 220	・PRO TOOLSを駆使してのCD製作 授業は各制作平行で進行する 1 PRO TOOLSの操作を学ぶ 2 課題楽曲の製作 3 映像と音楽のシンクロする楽曲製作 4 作詞、作曲をコンビ同士で作成 5 CDアルバム製作			
	計 228				
使 用 教 材	・PRO TOOLS SOL その他楽曲制作のための各種ソフト ・各音楽作成機器 ・各楽器				
履 修 上 の 意 注	・1年間を通じて製作作業を続けないと達成が難しい ・いろいろな優秀な機材を駆使して満足の行く作品が出来上がるのは努力が伴うので努力をしその喜びも学ぶ				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な作品提出・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30% などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		作編曲実習		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次		2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態
コマ数 / 週		1	総授業コマ数	38	単 位 数
担 当 教 員		桜井 力男 村山 秀樹	実 務 経 験	アーティストのバックバンド・レコーディング及び楽曲提供・編曲に従事。又音楽教室で後進の指導にあたる。これらの経験を活かし実践的な教育をする。	
目 的 / 概 要		・コンピューターによる音楽製作、又バンド等による演奏活動などにおいて、既存の曲・オリジナル曲の作曲、編曲を専門家とし独自に行える音楽の知識、技術を学ぶ			
到 達 目 標		・各自が正しい知識を身につけ、オリジナル性溢れる楽曲を制作、演奏し生涯にわたりそれぞれの分野で充実した活動が行える為の基盤作りをする			
目 標 資 格		・特になし			
前 提 知 識		・音階 調性 三和音(トライアード)程度の基礎知識			
授 業 計 画 計		コマ数	授 業 内 容		
		6	・各種楽器(弦楽器、管楽器、打楽器)の基礎知識		
		6	・ソロから大編成(ビッグバンド)のアレンジ		
		6	・様々な音楽スタイル(ジャズ、ラテン、etc)でのアレンジ		
		6	・デジタルな音楽とヒューマンな音楽の融合		
		14	・オリジナル曲の作曲、編曲のバンド演奏及びDAWソフトでの作品制作		
使 用 教 材		・実践コード・ワーク ・各楽器 ・DTM/DAWソフト			
履 修 上 の 意 注		・理論を知識として身に付けるだけでなく実際の現場で役に立つようにする			
成 績 評 価 の 方 法		・定期的な考査・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30% などを中心に総合的に評価する			

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名	デジタルミュージック科				
コ ー ス 名					
科 目 名	マニピュレートⅡ			科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	白鳥 徹	実 務 経 験	楽器メーカーのデジタル機器インストラクターとして、各種セミナー、講演会等で活躍。独立後は楽曲提供や音響技術者として活動。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 / 概 要	・シンセサイザーの応用的仕組みを学ぶ。 ・シンセサイザーの音色を作成できる力をつける				
到 達 目 標	・楽器の特性、曲に合った音色を作成できるようにする。 ・自分のイメージに合った音を的確に作成できるようにする。				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	特になし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	2	・機種によるシンセサイザーの違いを理解する。			
	2	・複数の楽器を使用したデータの作成。			
	4	・高度なデータ作成方法を学ぶ。			
	2	・各種シンセサイザーの仕組みについて学ぶ。			
	2	・波形データにしてからの音色作成について学ぶ。			
	2	・MIDIデータと波形データのミックスについて学ぶ。			
	24	・CD製作の仕方を学ぶ。			
計	38				
使 用 教 材	・DTM/DAWソフト、音源 各種シンセサイザー				
履 修 上 の 意 注	・卒業CD制作においてイメージ通りの音の表現が出るよう根気よく取り組む				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な作品提出・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30% などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名	デジタルミュージック科				
コ ー ス 名					
科 目 名	バンドアンサンブル実習			科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	3	総授業コマ数	114	単 位 数	6
担 当 教 員	青木 大志 村山 秀樹	実 務 経 験	ビッグバンドジャズから演歌の伴奏まで多くのアーティストをベース奏者としてサポート。音楽教室で後進の指導にもあたる。又バックトラックの作成・アレンジ・楽譜作成のアーティストサポートでも活躍。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 / 概 要	・各自同一楽器にこだわることなく複数バンドで演奏し 楽器の表現力や楽曲の編曲力やグルーブ感の向上を目ざし 総合音楽性をレベルアップさせる				
到 達 目 標	・楽器演奏実習やボーカルトレーニング・作編曲能力の 知識を生かしバンドを組み表現し総合音楽性向上を図り 創造活動ができるようにする				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	初歩的な読譜力 音楽理論 楽器演奏 コミュニケーション能力				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
		・音楽室、スタジオでのバンド演奏			
	36	既存楽曲の再編成、再編曲の学習			
	78	オリジナル曲の編成、編曲の学習			
計	114				
使 用 教 材	キーボード ギター ベース ドラム その他楽曲表現に必要な楽器・ミキサーなどの音響機材				
履 修 上 の 意 注	・バンドは共同作業なので自己意見を押し付けず他の人とのコミュニケーションを円滑にはかる ・一つの楽器だけに固執せず複数の楽器で演奏する ・既存楽曲のコピーは練習用としオリジナル曲や既存楽曲の独自の編曲を発表しないと意味が無い ・メンバーの真剣な取り組み 各バンドの卒業ライブでの聴衆を魅了するレベルを期待				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な演奏・・・20% ・卒業ライブでの演奏・・・20% ・授業への取り組む姿勢・・・60% を総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名	デジタルミュージック科				
コ ー ス 名					
科 目 名	キーボード実習Ⅱ			科 目 分 類	独自／共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義／実習／演習
コマ数／週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	工藤 さち子	実 務 経 験	楽器メーカーの音楽講師として、ピアノ・エレクトーンを指導、その後プレイヤーとして活動。現在はボーカル、各種楽器を幅広く指導する音楽教室を経営。これらの経験を活かし実践的な教育を行う。		
目 的 ／ 概 要	・音楽にとって最も必要な楽器と言うべきキーボード(ピアノ)演奏をレベルアップさせ音楽活動を積極的にする ・コンピュータミュージックに欠かせない「打ち込み」をスムーズにできるようレベルアップする ・卒業ライブ、バンドアンサンブルでの演奏レベルアップ				
到 達 目 標	・弾けない生徒もある程度の演奏能力を持たせる 経験者は更なるレベルアップ ・「打ち込み」の作業効率アップ ・卒業ライブでの演奏能力アップ				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	1年次の演奏技術、知識経験				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	10	・音階 コード 楽譜による演奏 アドリブ			
	10	・各自選んだ曲の演奏 個人の演奏能力アップ			
	8	・バンドのキーボード奏者養成 アンサンブル			
	10	卒業ライブ対策 アンサンブル			
	計 38				
使 用 教 材	・一般的な楽譜(ポピュラー中心) ・設備キーボード				
履 修 上 の 意 注	・気長にあせらず演奏能力を高めさせる ・授業時間外の練習の重要性 ・卒業ライブのレベルアップに繋げる				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な演奏試験・・・80% ・授業への取り組む姿勢・・・20%などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		ヴォイストレーニングⅡ		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	伊藤 優作	実 務 経 験	ボーカリストとして活躍、自治体行政機関の講師、音楽教室主任講師、プロアーティスト育成機関トレーナーとしても活躍。これらの経験を活かし実践的な教育を行う。		
目 的 / 概 要	楽器演奏以上に重要な歌う力を持つ ソロボーカリストを目指す バンドでのコーラス要員 歌う事によつての積極性の向上 又高度な聴音力の実力を学ぶ				
到 達 目 標	・楽器演奏以上に重要な歌う力を持つ ソロボーカリストを目指す バンドでのコーラス要員 歌う事によつての積極性の向上				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	・ある程度の読譜力 音楽理論 出来れば楽器演奏				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
		＜毎時実施＞ ソルフェージュ(視唱 イヤートレーニング) ヴォイストレーニング 歌唱力アップ コーラス 耳コピー ※ 1～7項目は毎時実施で習得、項目A・B中でも実施 1 胸式呼吸・腹式呼吸の使い方 2 地声と裏声の使い方の違い 3 声量の上げ方、ロングトーンの伸ばし方 4 声帯の筋肉組織の仕組み 5 甲状軟骨、輪状軟骨の筋力トレーニング 6 口腔や舌腔の筋力トレーニング 7 喉仏(喉頭蓋)や胸骨甲状筋のトレーニング			
	12	A 外国(英語)の曲を歌う 個人の歌唱力アップ(ヴォイストレーニングも含む)			
	20	B コーラス			
	6	3 卒業ライブ対策			
	計	38			
使 用 教 材	・ボーカルトレーニング用テキスト ・キーボード ギターなどの楽器 ・ミキサーなどの音響機材				
履 修 上 の 意 注	・声を出すことに消極的な生徒への対策 ・遊びと錯覚する可能性に対しての真剣な取り組み ・卒業ライブのレベルアップさせる。				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的試験・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30%などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		音響実習Ⅱ		科 目 分 類	独自／共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義／実習／演習
コマ数／週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	白鳥 徹 村山 秀樹	実 務 経 験	楽器メーカーのデジタル機器インストラクターとして、各種セミナー、講演会等で活躍。独立後は楽曲提供や音響技術者として活動。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 ／ 概 要	・CD製作に必要な知識を学ぶ。 ・ProToolsの操作を学ぶ。				
到 達 目 標	・ステレオソースのレコーディングが行えるようにする。 ・マルチトラックレコーディングが行えるようにする。 ・ProToolsを使用した編集を行えるようにする。				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	特になし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	6	・レコーディングの基本知識を学ぶ。 マルチトラックレコーディングの知識を学ぶ。			
	32	・ProTools実習 教室機材説明 ProToolsの基本操作 DTMデータの録音 マイクを使った録音 マルチトラック録音 CD製作のトラックダウン・マスタリング			
	計 38				
使 用 教 材	・DTM/DAWソフト、音源 ProTools マイクロフォン オーディオインターフェース デジタル・アナログミキサー その他音響機器				
履 修 上 の 意 注	・卒業CD制作においてイメージ通りの音の表現が出るよう根気よく取り組むこと				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な実技試験・・・70％ ・授業への取り組む姿勢・・・30％などを中心に総合的に評価する				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック			
コ ー ス 名					
科 目 名		ビジネススキルトレーニングⅡ		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	2	総授業コマ数	76	単 位 数	4
担 当 教 員	村山秀樹	実 務 経 験			
目 的 / 概 要	・MOS検定 Word, Excel, PowerPOINTの合格を目指す ・実社会で活躍する際必ず必要になるであろう表計算ソフト、ワープロソフト、プレゼンソフトが出来るよう学ぶ				
到 達 目 標	・学習到達目標は、MOS Word Excel PowerPOINT合格 ・Word Excel PowerPOINTの基本的な操作、知識を学ぶ				
目 標 資 格	、MOS Word Excel PowerPOINT				
前 提 知 識	タイピング能力				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	28	Word ・文書の書式設定と管理			
	4	Excel ・データとコンテンツの作成			
	10	・データとコンテンツの書式設定			
	6	・ブックの管理			
	8	・データの分析			
	10	・グループ作業			
	10	PowerPOINT ・各自の進捗状況に応じ学ぶ			
	計	76			
使 用 教 材	・MOS検定対応 Microsoft Office Specialist Word /Excel/PowerPOINT				
履 修 上 の 意 注	・合格を目指す強い意志のもと学ぶ。				
成 績 評 価 の 方 法	・定期考査・・・70% ・授業時間の取り組み態度・・・30%で総合的に判断				

シラバス

作成日：2025 年 4 月 1 日

学 科 名		デジタルミュージック科			
コ ー ス 名					
科 目 名		専攻実習		科 目 分 類	独自 / 共通
履 修 年 次	2	履 修 学 期	通年	授 業 形 態	講義 / 実習 / 演習
コマ数 / 週	1	総授業コマ数	38	単 位 数	2
担 当 教 員	工藤 さち子 桜井 力男 高橋 寿和 青木 大志 白鳥 徹	実 務 経 験	楽器メーカーの音楽講師として、ピアノ・エレクトーンを指導、その後プレイヤーとして活動。現在はボーカル、各種楽器を幅広く指導する音楽教室を経営。これらの経験を活かし実践的な教育をする。		
目 的 / 概 要	・コンピュータミュージックを作るうえで更なるレベルアップを目指し、楽器(ギター・ベース・ドラム・キーボード)や歌入れ(ヴォイストレーニング) 音響(音響技術)を前期3科目、後期残り3科目を各自が3科目から1科目以上選択(複数及び全科目選択可)する ・各科目毎に各自の1年時の実力及び2年時の実習を踏まえ個人毎の高度なレベルを学ぶ。 ・各科目毎に各自の1年時の実力及び2年時の実習を踏まえ個人毎の実習内容を設定				
到 達 目 標	・各教科ごとに1年時、2年時にカリキュラムで培う技術・知識よりワンランクの上のレベルの実力を学ぶ。				
目 標 資 格	特になし				
前 提 知 識	特になし				
授 業 計 画	コマ数	授 業 内 容			
	3	・各自の現在の知識・技術確認			
	2	・各自の現在の知識・技術を踏まえ個々に合った実習内容説明			
	33	・各自の進捗状況に合わせ各教科実習			
	計 38				
使 用 教 材	・DTMソフト、音源 ProTools マイクロフォン ギター ベース キーボード ドラム 音響機器				
履 修 上 の 意 注	・卒業CD制作においてイメージ通りの音の表現が出るよう根気よく取り組むこと				
成 績 評 価 の 方 法	・定期的な実技試験・・・70% ・授業への取り組む姿勢・・・30%などを中心に総合的に評価する				